

# 自己ベストでの初V

## 学生ゴルフをエンジョイ

2 アンダー 70

長崎国際大3年・赤瀬新菜



長崎国際大のメンバーたちと。カップを頭に乗せているのが優勝した赤瀬

赤瀬本人が目を見開いた。「1アンダーなんてあったかどうか。70は初めてです。非日常ですね」と3バーディー、1ボギーの自己ベストとなるナイスラウンドを振り返った。イ

ンスタート。12番で2m強を沈め、15番で5ヤードのチップイン、続く16番でも6mをものにして、前半の7ホールで3バーディーと調子に乗る。だが、18番でドライバーをミスしてボギーを打つと、後半のアウトではピンチが続いた。上がり5ホールのうち4ホールでパーオンに失敗したが、全てパーでしのいだ。

「全体的にアプローチが良かった。最近は調子が良く、自信を持っていました」。それは「落ちる場所をずっと見るのが大事」などのコーチ陣からのアドバイスを素直に実行に移した成果が出たのだった。

北九州市出身。同市の星ヶ丘小1年から父・裕二さんの影響でゴルフを始めるが、練習が楽しくなくてゴルフから離れた。小3で再度始めたものの、九国大付高2年時に「いい結果が出ずに」とやめる決心をする。そんな時、裕二さんから知人を紹介されることに。父から「遊びでいいよ」と言われながらも、インに引いて極端にフックが出ていた赤瀬のスイングを1カ月かけて修正した結果、ある選考会で好成績を収めたのだった。そこから再びゴルフに対する熱が沸き上がる。赤瀬は高3までゴルフ部のある学校には通っておらず、コーチとマンツーマンで過ごしてきた。

「今は仲間もいるし、楽しいので自分も頑張ろうという気持ちになる。今度も『みんなでプレーオフをしよう』と話していたんです」。今大会5位までのうち長崎国際大の選手が4人。合言葉が実現しそうな勢いだった。初の挑戦となる日本学生。「全国大会は初めて。出たいとは思っていたけど、そこまでいけるとは…。自信もなかったけど、自信を持っていきたい。自分のリズムを崩さないようにプレーしたい」と控えめな笑顔を見せた。

# 最終学年で初優勝

## 初の「九州」というタイトル

通算4 アンダー 140

東海大九州4年・夏伐蓮



ワン・ツー・スリー・フィニッシュの東海大九州。東海大の「T」ポーズをする。  
左から2位の中野、優勝の夏伐、3位の遠藤

大学生活最後の大会で頂点にたどり着いた。「ずっと優勝したかったので本当に嬉しい。ずっと2位ばかりで」と夏伐がしみじみと口を開く。昨年などは出場した3試合で連続の準優勝。歯がゆい思いをしてきただけに、喜びもまた格別である。優勝は「高1か高2以来」という。「九州」という名の付くタイトルは初めてだ。

学生は1日2ラウンド、つまり36ホールで勝負を争う。夏伐は第1ラウンドを3バーディー、2ボギーの71でトップに1打差の2位タイ。そして第2ラウンドでまくった。3、5、11番でそれぞれ2・5m前後のバーディーパットを沈めた。ボギーなしの69。2ラウンドで唯一人60台をマークした。「あまりパーオンはしていなかった。第1ラウンドは耐えるゴルフでした。(第2ラウンドは)アプローチも噛み合いました」と逆転優勝に納得の表情をした。

宮崎市出身。東海大九州では副主将を務める。今年3月、くまもと城南CCであった「PGA資格認定プロテスト九州予選」では3アンダー141でトップタイ通過し、8月の北海道・登別CCでの最終プロテストに進む。「合格する自信はあります」と胸を張る。と言うのも、今は自分のゴルフに確信があるからだ。「今年、自分の中で決めたいです。『攻めて行こう』と。以前は、例えば2アンダーくらいだったら、守りに入っていた。メンタル面を変えました」。アグレッシブなゴルフというのだろうか。それまでは70、71のスコアが多かったが、60台の頻度も増えてきた。

自信という鎧をまとった夏伐が最終プロテスト前に迎える8月の日本学生。「ネームでは負けているけど、優勝したいですね」とV宣言をした。勢いはある。



18番ホール。グリーンをぐるっと囲むクリーク



コース近くには風力発電の風車